

薩摩川内市公式訪中報告書

平成25年10月21日

平成25年度薩摩川内市公式訪中団
副団長 瀬尾和敬

1. 訪中の目的

中華人民共和国江蘇省常熟市人民政府を表敬訪問し、平成23年度鹿児島純心女子大学と友好締結を結んだ常熟理工学院や、薩摩川内市内及び近隣市町村誘致企業の現地法人等の視察を行う。

また、本年8月25日、日中定期コンテナ航路就航に伴う貿易振興推進のため、常熟港や上海港の視察及び本航路の開設会社である現地法人への表敬訪問を行うとともに、中国国内の現況等の情報・意見交換等を行うため鹿児島県上海事務所を訪問する。

2. 訪中の時期

平成25年10月16日～19日の4日間

3. 訪中のポイント

- ①中国常熟市人民政府表敬訪問
- ②中国コンテナ航路就航に伴う、上海港・常熟港の視察及び開設会社である神原汽船(株)の現地法人への表敬訪問
- ③常熟理工学院視察(平成23年度 鹿児島純心女子大学と友好大学締結)
- ④市内及び近隣市町村誘致企業の現地法人視察
アサダメッシュ(株)(祁答院町) 日本特殊陶業(株)(さつま町)
- ⑤鹿児島県上海事務所表敬訪問

4. 訪中団員名簿

団長 岩切秀雄(市長) 副団長 瀬尾和敬(市議会議員) 田中憲夫(川内商工会議所会頭)
萩 亮(鹿児島県北薩地域振興局長) 福村信哉((株)薩摩川内市観光物産協会専務取締役)
木原俊孝(鹿児島純心女子大学事務局次長) 井上敏孝(日本通運(株)川内支店長)
田代健一(総務課長) 佐多孝一(企業・港振興課課長代理) 林田瑛子(通訳)

5. 常熟市の概要

常熟市は、江蘇省の東南部に位置し、東は上海、南は蘇州、昆山、西は無錫、北に長江を望み、その対岸に南通市がある。経済成長著しい長江デルタ経済圏の主要工業都市のひとつで、中国における歴史・文化・国家の衛生都市、庭園都市、優秀観光都市、治安先進都市として、また、国家環境保護模範都市としても高く評価されている。

常熟市の発展は著しく、永年にわたり連続して「全国百強縣市」のベストテンに入り、「財神縣市」(お金の神様が留まる縣市)として、全国でも3位にランクされている。数多くの外資系企業が進出しており、日系企業では、トヨタ自動車、シャープ、住友ゴム工業、ダイキン工業、日本精工、大同工業、富士電機、三菱商事などが活発な事業展開をしている。

《位置》

東経 120度32分～121度 3分(薩摩川内市 130度13分)
北緯 31度30分～ 31度50分(薩摩川内市 31度49分)

《「常熟」の由来》

大洪水や大干ばつでも、いつも豊作(常に熟する)であったことから、この名前が付けられた。

《人口》

市街地 63.5万人、総人口 129万人で、薩摩川内市の10倍強である。

《面積》

1.264㎢で、薩摩川内市(683.5㎢)の約1.8倍である。

《地形》

市のほとんどが耕地と湖で形成されており、山は市の中心部にあるのみで、形状大きさは本市の「寺山」に似ている。

6. 本市と常熟市友好交流の経過概要

昭和56年1月、当時の市長が中国訪問の機会を得たのを契機に、「日中友好川内市民の船」参加者募集、一般市民を始め各種団体・企業・私立学校等の協力により、10月に365名の「日中友好市民の船」訪中事業を実施。これを機に日中友好の気運が盛り上がり、県内初の「川内市日本中国友好協会」を設立。

昭和60年、中国との国交が回復し全国的な日中友好ムードが進行する中で、本市に於いても重要港湾「川内港」の利活用の促進、産業経済の活性化を図るべく中国の港湾都市との友好都市を目指すことになり、第1次経済調査団を派遣、4つの港湾都市を調査した。昭和61年に第2次、62年第3次、63年第4次経済調査団を派遣し、平成3年7月26日、常熟市との友好都市締結に至った。

平成6年4月、友好都市3周年を記念して、尚湖のほとりに「川内の森」を建設。10周年記念事業として、常熟市から寄贈された「琴川亭」の落成式。平成17年、新市誕生による再調印。平成23年8月、友好都市締結20周年記念事業実施。平成25年度までに、公式訪中団、市民訪中団、文化・スポーツ交流団など100団体(3,000名)を超える訪問団を派遣、また常熟市からは35団体(約400名)が来訪している。

《常熟市に目標を定めた理由》

- ①上海市に極めて近い(約100km)港湾都市であること。
- ②揚子江に面した国際貿易港の整備が進められていること。
- ③緯度が本市とほとんど同じであること。
- ④面積及び人口規模が中国における常熟市の割合と、日本における本市の割合がほぼ同じであること。
- ⑤農業や軽工業を中心にして発展しており、経済的に豊かな都市であること。

7. 公式訪中の概要

次ページ以降に記載。

【1日目】10月16日
◎常熟市長表敬訪問

【対応者】 王 市長 外事弁公室職員など13名



【1日目の所感】

合併後間もない2005年に、市議会議員団の海外視察で、常熟市へ行ったことがある。行きは鑑真号で中国へ渡り、帰りは飛行機だったが、常熟市で熱烈な歓迎を受けたことを思い出す。また常熟市は、人と自転車の多い街という印象が強かった。

今回は、公式訪中団の一員として常熟市へ赴いたが、友好都市締結後20年を超える両市の関係は、円熟味を増していると感じた。これまで、主に青少年の文化・スポーツを通して相互交流は続けられてきたが、神原汽船による川内港～上海航路が開設されたことから、今後は揚子江の上流に位置する常熟港を活用した経済間交流が深まればいい、と思った。

8年前と大きく変わった点は、トヨタ自動車の進出が拍車をかけ、車が増えたという点だ。また、自転車の数が減り、替わって2000元(約3万円)ほどの電動自転車の利用者が増えており、経済の大きな発展は特筆すべきであると思った。

王市長は45才、若くて切れのある方である。副市長は7名であり、その中に共産党幹部や35才以下の若い人材を登用する条件等もあるという。市長は、今後も両市の交流が更に深まることを希望された。

【2日目】10月17日

◎尚湖視察

【対応者】朱 国際交流員



尚湖は、満々と水を湛え、市街地と見事な調和を保ち、山、水、街が一体となった美しい山水画を思わせる風景が広がる国家5 A級の観光地である。日本の国立公園に当たる。総面積は25km²、その中の核心区の水域は800畝。約500種類の動植物が生息している。平成6年、川内市との友好都市締結3周年を記念して、尚湖のほとりに「川内の森」が建設され、700本の楓が植樹されている。

休日ともなれば、多くの市民が自然を親しむために押し寄せるといふ。市民であれば、この尚湖までの市営バスの運賃も、尚湖への入場料も無料とのこと。かつて食糧政策を進めるために、この尚湖を埋めて田園にしたが、環境破壊が問題視され復元したという話は興味深かった。

水は揚子江から取り込み、揚子江の下流に戻しているという。

◎常熟理工学院訪問

【対応者】朱 学長 外幹部教授



常熟理工学院は、1958年に創立され、理科をベースに応用技術育成と教師養成を特色とする省立本科大学である。大学の職員は1,100人余りであり、その内専任教師が750名である。大学には学院が、人文学院、外国語学院、芸術学院、物理・電子工学院、機械工学院など12あり、専攻が52もある。在學生は12,000人を超え、他に高校以上の学歴を有する社会人に向けた成人教育に5,000人余りが在籍しており、総勢およそ18,000人である。

近年、国際交流を推進し、日本、アメリカ、イギリス、ドイツなどへ専門家や学者を派遣、またこれまでおよそ100人の外人講師を迎えている。本市からもこれまで7名が日本語講師として訪中している。

常熟理工学院は「質量により学校を作り、特色により学校をPRし、人材により学校を強め、開放により学校を生かし、文化により学校を興す」という鮮明な戦略を展開している。

外国語学院の日本語専攻の学生さんと意見交換会をしたが、日本で自分の語学を試したいという気概が伝わった。学院としては、4年の修学期間の内、2年間留学させてくれる日本の大学を探して居られる様子であり、北陸大学でその条件が整ったということである。今後、友好締結している鹿児島純心女子大学も何らかの方法を検討される模様である。

就職率は100%、主に外資系の進出企業に就職している。

◎常熟港訪問

【対応者】 邵 常熟市政府港口管理局副局長 外

常熟港は常熟東南開発区から車で約10分、上海港を中心とする国際海運の一員でもある。現在バースが12基あり(1万トン以上;6基)、世界46カ国、203の国際港との定期海運が行われている。日本の大阪港、神戸港、名古屋港、北九州港へは、2~3日おきに1便就航されており、2009年の貨物取扱量は4.460万トン、コンテナ33.4万TEUであり、中国河川港湾の10大港湾の一つである。2030年までには、50万TEUを目指している。何としてもお付き合いさせていただきたい港である。



◎常熟特殊陶業有限公司(日本特殊陶業)訪問

【対応者】 平田健一工場長 外

「NGK」でお馴染みの日本特殊陶業は、1936年(昭和11年)、スパークプラグの製造会社として創立した。順調に業績を伸ばし、2013年現在で子会社34(国内9社、海外25社)を有するまでに成長した。年間売上高は、3,000億円を超え、純利益も200億円を超えている。

常熟特殊陶業有限公司は、江蘇省常熟市に敷地面積4万800㎡、工場面積1万㎡で立地し、精密機器部門として「NTK」というネーミングで、2013年夏から、自動車用酸素センサーの年間240万個の量産を目指している。



《2日目の所感》

①尚湖・・友好都市締結3周年を記念して建設された「川内の森」を8年振りに眺めた。樹木は生い茂り、異境の地、中国常熟市の尚湖の一角に、「川内」の存在感を見た。尚湖が中国でもトップクラスの観光公園に指定され、常熟市民の環境衛生向上に大きな役割を担っていることを実感した。

②常熟理工学院

元々は機械工学を主とした人材育成を行っていたが、近年は外国との交流を含めた常熟市の唯一の総合本科大学に大きく発展した。機械学科と日本語学科はレベルが高く、外資系企業へ多くの優れた人材を送り出している。学生数700人の純心女子大学とは比較にならないほど大きな大学ではあるが、条件が折り合えば両大学のさらなる交流が可能であると感じた。

③常熟港・常熟市との交流が始まって22年。交流の主眼である航路による経済交流を進展させるため、神原汽船の川内港～上海港就航を契機に、更なる努力が望まれる。

④常熟特殊陶業有限公司(日本特殊陶業)

とてつもない大企業に成長しているが、中国の大気汚染問題解消に直結する、NTKによる自動車用酸素センサーの製造は、今後需要の大きな伸びが期待できる。

10月18日、上海工場10周年と本工場オープン祝賀会が同時開催された。

【3日目】10月18日

◎蘇州淺田精密網有限公司(アサダメッシュ)訪問

【対応者】神園義治工場長 熊田恭次副工場長

アサダメッシュ株式会社は、昭和15年、浅田金網製造所として大阪で産声を上げ、昭和47年に法人化、同49年には祁答院町に鹿児島工場を新設し、平成5年にアサダメッシュ株式会社に社名変更した。平成15年に事業拡大のため、中国江蘇省蘇州市に蘇州浅田精密網有限公司を設立した。

当初は、製紙用すき網を制作していたが、技術改革により、世界でもトップレベルのスクリーン印刷用世界最高峰精細メッシュを生むまでに大成長を遂げている。



◎神原汽船有限公司訪問

【対応者】谷口瑞穂上海神原汽船事務所長 外

神原汽船は、1903年、初代社長神原勝太郎氏が帆船3隻を購入して海運業を興したのが始まりである。1943年、瀬戸内海船舶株式会社として法人化され、1948年、社名を神原汽船株式会社として現在に至っている。

1963年北洋材協定、1968年には南洋材協定に加入し、近海区域へ進出、1967年には初めて遠洋船天勝丸を常石造船で建造し、遠洋航路に参入した。現在、不定期船部門は数十年に亘る実績により荷主より大きな信頼を得て、太平洋、インド洋の貨物輸送に携わっている。また多くの貨物船、自動車専用船を世界の運行会社に定期傭船として提供している。

1983年には、日本とグアム、サイパン、パラオ等のミクロネシア諸島を結んで開始した定期路線は、極東、東南アジアの各港へサービス網を拡大、ヨーロッパ及びオーストラリアからの荷物も扱っている。1994年には、日中航路を開設し、中国の上海、大連、青島などの主要港及び長江流域の各港より日本の瀬戸内、九州、日本海側の各港、北海道へとサービス網を広げている。

平成25年8月、川内港～上海航路を開設、中国航路を熱望していた薩摩川内市の悲願を叶えていただいた。



◎上海港視察 【対応者】 蔡 上海国際港副所長

上海港は、19世紀半ばに对外开放された中国最大の港湾で、長江の河口に位置し、背後圏に経済成長著しい上海市、江蘇省、浙江省を有し、更に近年開発が進む長江中、上流域からの貨物が集積することから、貨物量が飛躍的に増加している。2011年に公表された資料によると、総貨物取扱量7億3千万トン、コンテナの取り扱い個数が31,739,000 TEUであり、世界第1位の港である。コンテナ船からトレーラーに積み込む作業はモニター操作で行われ、そのスピード感には唖然とさせられる。



◎鹿児島県上海事務所との意見交換

【対応者】 米盛幸一鹿児島県上海特産品協会上海事務所長

鹿児島県は、平成22年7月1日、「上海マーケティングプロデューサー」の活動拠点となる現地代表事務所を設置した。中国市場の情報収集、市場流通関係者等との人的ネットワークの構築、県産品販売チャンネルの開拓、商談会、物産展等海外事業の促進(輸出入に関する市場調査、貿易情報収集等)などを担当している。また、観光PRによる中国からの観光客誘致を促進している。

《3日目の所感》

①蘇州浅田精密网有限公司(アサダメッシュ)

会社幹部が鹿児島弁の通じる方で、心置きなく会話ができた。メッシュの需要は高まっているが、如何せん部品製造メーカー故、大手企業からダンピングの要請もあり、経営的には厳しい一面もあるようだ。しかし、会社を挙げて更に極細密なメッシュ製造に取り組んでおられ、製造技術に於いては世界最高峰の地位を保っていかれることを実感した。

②神原汽船有限公司

今年8月に、薩摩川内市にとって悲願の川内港～中国航路を実現していただいたわけであり、終始和やかな雰囲気の中で懇談ができた。ただ、実績が低迷するようでは折角の航路開設も意味がないので、今後も気を引き締めて顧客の維持・増加に努めなければならないと感じた。

③上海港・・・港関連のトレーラーがひっきりなしに行き来しており、道路は上りも下りも大渋滞である。港湾の活性化は地域経済の動向と深く関わりを持つことが分かる。上海港は余りにも巨大すぎて、川内港とは比較しようもないが、敢えて言うなら、せめて安心して港湾作業ができるように、川内港のハーバークレーンの新設は急がなければならないと思う。

④鹿児島県上海事務所

昨年、中国と日本の関係悪化により、中国からの観光客が激減した。中国への県産品輸出に関しては、米・梨・リンゴ以外の農畜産物の輸入制限があるほか、原産地証明書、放射能証明書が必要であり、また、輸送費、関税、増値税等のコスト高により、日本での販売価格の2倍～2.5倍になるなど苦戦を強いられているようだ。鹿児島事務所としても、販路拡大・輸出拡大策として、①県産スイーツのプロモーション②交易会・展示会等への出展③日系百貨店での県産品テスト販売④九州自治体事務所による共同宣伝⑤バイヤー・インポーター招聘及び求評会などを行っているとのことである。

薩摩川内市として、海外進出戦略をとる際にはしっかりと上海事務所と連携したい。

《公式訪中を終えて》

8年振りの中国訪問だったが、経済大国に大成長した中国の底力をいやというほど見せつけられた。常熟市は、当時は発展途上の田舎街という感じだったが、今や経済力を背景に腰の据わった急成長した街へと変貌しており、また市民の交通マナーも著しく向上していた。

通訳を介した公式な両市長の挨拶の後、場所を変えて晚餐会に入るのが通例であるが、この晚餐会も会談の延長であり、おろそかにできないものがある。仲間意識を高めるための白酒による「乾杯」も頻繁に行われるが、先般青少年スポーツ交流団長として訪日された体育局余副局長とは、再会を喜ぶ「乾杯」を行い感慨深いものがあった。

またその際、45才の若きリーダー王市長に、岩切訪中団団長より「尖閣諸島の問題について」質問がなされたが、「尖閣諸島の問題は国レベルの問題であり、民間交流には影響はない」と爽やかに、つぶさに答えられた。次代の中国を担っていかれる人物なのだろう。

本市と常熟市との20年以上にも及ぶ友好関係は、中国政府も太鼓判を押しているという。両市の友好関係が更に深まり、相乗効果で両市が更に発展することを期待したい。